

台地・段丘の上位3段までは畑作，低地では稲作が行われているが，すでに後退しつつあり，農家の家計の中心は農業以外のものに移っていく傾向が強くなっている。

鳥海山北西麓の地理学考察

与謝野たづ

きさかたの桜は波に埋もれて花の上こぐ海士のつり舟 西行
世の中はかくても騒りききさかたの海士の苦やを哀宿にして 能因法師
きさかたや雨に西施がねむの花 芭蕉

私は一番初めにきさかたのみを卒論のフィールドにしようと思い立った。子供の頃からこの地には遠足で何度も来たことがあるし，先生のお話によると何でも地形的に面白い所らしい。それにこの地が隆起する前の風光は大変明媚なところであったようで，西行とか芭蕉とか有名な人々が来てなんとなくいい歌や俳句を残していった。地震の為に海が陸になってしまったということやその前は八十八潟九十九島があったということ等々，夢がいっぱいあるような気がした。しかしながら卒論のフィールドは5万分の1の地区のみの範囲にわたるものでなくてはならないので，きさかたは卒論フィールドの一部になってしまった。

鳥海山北西麓はきさかたを含むところの泥流地形，火山の二次堆積物による火山山麓扇状地及び鳥海山から流れてくる白雪川の作った平地，断層地形，砂丘など多様な地形の分布する地域である。ここの地形は大体次の3つに区別される。(1) 奈萱川扇状地 (2) 本郷凹地，(3) 白雪川上位扇状地，(4) 白雪川下位扇状地，(5) 白雪川三角州世低地 (6) 仁賀保丘陵 (7) 泥流丘密集低地 (8) 海岸低地。

鳥海山は第三紀層を基盤とする2320mの火山である。従って当地域には第三紀層の露頭が随所にみられる。当地域の主な土地利用は山林と採草地と水田であり，山林と採草地は山地及び石の多い扇状地なので到底水田化できないところに分布する。よって土地利用を考察する点では水田だけを考えればよいことになってしまった。水田をどのような角度からみればよいかがということが悩みの種となったが，この地域が火山山麓であるにもかかわらず近隣の庄内平野に較べ，開発が早いことに注目し，その理由を地形及び気象の特質に求めた。それはかんがい水をひきやすい地形，ため池を作りやすい地形，泥流丘からの蘗植や泥と火山灰より土壌がなり比較的耕作しやすい土壌

及び冬の積雪が火山山体で蓄わえられ夏の水に困らないこと、気温が温暖なことなどの理由である。次にこの水田をかんがい及び排水の面からとりあげた。かんがい水は豊富だがこの水が冷水である。冷水をいかにして克服しているかをとりあげ、次に排水不良地の分布が広いことと冷水と排水不良の組み合わせによって水田に害を及ぼしていること、排水不良地が多いのは複雑な地形に由来することなどを調べた。次に水田化の歴史を地形的にとらえ、結局、かんがい用水のひきやすい所から漸次に開発されていき水田化は低平地からなされたのではないことが分かった。

水田農業地帯としてこの地域を考えると、多くの問題がある。その中でも最も大きなものは冬の労働力の過剰である。その為、大部分の人には冬の出稼ぎは必須のものとなってきている。この地域ではこの出稼ぎは社会問題になってはいないが、家族と離れて、2ヶ月も3ヶ月もの長い間異郷で働かなければならないことはやはり問題である。次に専業農家の減少、兼業農家の増加という現象、稲作以外の生長農産物の導入が進んでいるという現象が注目される。このことは農業技術が進歩しているし又、農家の収入が増えているということを示しているが、半面この地域の農家が稲作一本やりで生計をたてることが困難になっていることをも物語っている。この兼業化への過程、他の成長農産物導入の程度と一戸当り経営耕地面積の関係は、この地域の中で設定した旧町村と一致するところの農業区の間でいろいろと面白くんでいる。例えば、一戸当り平均経営面積の多いところは兼業化の程度が少く、経営面積の少ないところは兼業農家が多くしかも工業が起っている。又、このことは鉄道の通っている海岸平地と山地の農業区のうちがいとしても現われている。しかし、程度の差こそあれ全体として農家の兼業農家への移行は大きな傾向である。

さて、この地域を調べるに当って困ったことは参考にするような地理研究が少なかったことである。明治時代の鳥海山地質調査報文という研究と東北日本の泥炭地形という研究があっただけで、この地域の地域性をとらえるには、どんなことを足がかりとしてどのような方法で行ったらよいか分らず、多分に一人よがりの心もとない考察になってしまったと思う。が一面、人の研究にまどわされずに自分の思うままのことを書けたとも思う。